雙蝶記

一名霧籬物語卷之三

饒過東

東又西本

京山人纂

於
181
3

へ13
181
3

東京帝國大學圖書

186
3

雙蝶記一名霧籬物語 卷之三

江戸 山東庵京傳 編

六 陽炎しもきろろ狂ふ牡丹の睡猫

月影不谷判官の執權職山咲庄司雪森と三人の子あり。兄を餘字兵衛とのへ。次を餘吾郎とのへ。末の娘を小雪といふ。惣領乃餘字兵衛ハ。妾淀瀬ヶ十九歳のとき産る子まて。其後ちがひく子ありしが。て本妻の夕波とても産ぬ。されど本妻妾ともにそろさ女をぐする者まて。平日なうむつまじく。嫉の心ハ露ともなかりきとぞ。本妻小雪を産るとき。庄司の主君判官よりさづけて。信州笘形の軍よむうん。其留主よ

産をたゞる。本妻産後のふやうく。死よう〳〵をこゝろ〳〵庄司
阪陳し。鎧をぬぐ間ざふく。其侭そ臨終の枕もふいてりるが。此病中
妾淀瀬心をつくして看病し。此ともそでふ枕もつそひく泣
居るふ。本妻ろるゝ息をつきく且夫よいの久。妾むすくりて
後后妻を他うむくまゝくい。三人の子どもらがあるべし。
ねがくハ淀瀬どのとめ〳〵あて本妻とおもふうまくべ。
淀瀬よむひ。餘五郎小雪等を実の子のごくれおりて。養育を
よくむり。もくバ妾草葉の陰までも心を安くし。子ゆゑよ迷ふ黒
暗の地獄の苦患をまぬれんといのおきく才まりぬ。是よりまくく
日数ふりくのち。庄司淀瀬と本妻よせやとのひ名れども。淀瀬を
ひこもこれを辞退せもれどゞ亡妻の遺言とのひ子どもらのふ

ふまゝこと。あるじちよもそふて遂よ主君小願をいぐし。あ〳〵ありて淀瀬
と本妻まそもふる。素淀瀬い志をく正き女名れ。前妻の遺言
とふくはり。実子の餘字兵法いもふ。継子の餘吾郎小雪
二人の者を深くいつくし〳〵。朝夕撫按心をりらくく斉名が。惣領乃
餘字兵法いふる所存や。十五歳の時出家剃髪の望りふ
書置を残して出奔し。行方名れぞりぬ。此時餘吾郎も六歳
小雪いまだ二歳多。其後小雪四歳の時乳母よ抱を庄司ふぐ
つきそふく。甘縄の神事よ又名行。ふさ鷺よさ〳〵れて行方名れど
淀瀬ハれをくとのふ。心乱をたふ歎悲。前妻の位牌ふ
むかひてもいひけるハ〳〵おりの名れども。庄司ふぐふ連去ふ。ハれ
災ふのふる支名れど。誰ど恨む人もふ。唯生死のふ〳〵ざれを

露ぐらのさのみふかして。ト盆とおろ神仏を祈さまぐくよ心を尽し。
近國の山〳〵驚の栖べくおりふかぐらを。残らぞろりあるじ
更よ行方もれざれど。失る日と余日ふかして仏支をいとゝ。菩提乃
種を植るのこゝろ。されども九夫のあさましきかな。神仏の擁護にも
活ぐ〳〵居るこゝろやと。夫婦朝夕の物語のくさ〳〵も此支をいの
出ずして。泣ざる男ぞなき。此小雪い生つき美麗玉乃やうなる顔
ろうしが。高頬ホ一つの黒痣あり庄司が高頬よも黒痣ありけるぞ。
これぞ父の譲の黒痣ぞと。平日の口もとにもいくるぞ。ト余よ恙なく
唯是のみ後の證拠なるよと。淀瀬ダ歎いよも理なり。ト庄司
三人の子を持ぐ。惣領を出奔して娘い失て生死もれぞ。唯家よあろ
者い餘吾郎一人なり。是等の始終をくわしくよ支長く讀ホもろ

らべくれた。其要を撮くるものゝ。叔餘吾郎成長よまでゝて淀瀬
を實乃母のごくに敬ひそだれを。淀瀬も不便いやまして。いつしむ
と限ず〇かくて今年庄司い五十五歳よぞ。餘五郎ハ二十二歳よぞ
いとりける。叔又庄司ダ父餘吾郎ダ為の祖父なる浄閑居士今年五十
年の遠忌よあるにより。菩提のさる紀州高野山へ石塔と建常住
金を納むべくと。ト立主君よ願ひ餘吾郎を代参として。紀州へゆ
しむべきみ定まりけるダ。餘吾郎いまだ若年なれど。物馴る者を副
つくもべくとおりふ。家来南方十字兵衛今年五十餘歳の老人ぞ。
老實る者なれど。これを守役として。常住金二百両石塔料百両都合
三百両別よ路用を持しめ。已よ行装ゝてのれた。吉日とゑらみ。石工ら
鎌倉を発足し。かどく京都よ着く旅宿をとる。

余ハて石塔を造らをる間もなく當地ゟ逗留ーて居ようがの
此ーゟ彼箕腹越右湾門も。主用まそ。上京ー。旅宿ゟ逗留の間
餘吾郎ゟ出あひ。ふびんゟ旅宿のつまくを問あひおるゟ二人連
立く名所古跡かどとーふびゟ旅乃憂を慰めるが。これよつてく
蛙右湾門が心中ゟ悪計をおりひつてくるる。後ふぞおりひもーまるる
都五条坂ゟ賣暫らまてく。富士屋の吾妻ーゟ阿曽比ーより。且よい
古とおもう。ダよい新ときむくつて。寄てくるあざ浪の桃さざめぬ憂身
るべーといつるも宜哉駕籠塵兵湾ゟ娘小蝶ハ手越の里ゟ一歳住其後
しめ。民屋の衰柳も。移く宮苑ゟいよ千尺の翠條。別ゟ春風長
原貧家ゟ育ー娘るれど。花杓の街ゟ移植く。玉乃笄

綾羅の衣。十分ゟ粧りをれど。自然の美艶ゟ今一ーかの色まて。
嬌艶人をおどろかす。花魁娘子ーぞうりにる。素聰明生るれば糸竹の
るべの更ゟり。歌学繪くる花むしろのうへの艶雅ゟ業ゟいくる
まで。くれとさーー。情のいろハ殊更ゟ深うりく。此五条坂ゟ早くも
五年の春秋を過ーく。今ハ十九才ゆいくる。扨一日吾妻ゟくるも
るゟ蓼囓そいて。錦のふけ紐ゟ金銀の鈴とつけくる縞と結くる
手飼の猫とさーくる女童ゟ抱せ赤前掛の花車の女ゟ日傘を
さーけさせく。邯鄲の歩をうつして。紘歌の声のいとあやまるる街ゟ練
出るが。留木の薫馥郁とーくるあうく紅乃人と襲歩むよろぼく
裙のあるさま。婷娟ゟる花のうてさゆるうと疑れぬ。かる荊
しも古綿帽子と頬ふりかーく。針目ぐらゐる布子と黒杖よろぼいて

貧げる老女。吾妻がありし側らへ寄て。そんつくりまろ後前うつきはしふさま。ゆ〳〵ふ年旧老猫の小蝶よ狂ふごくうる。花車の女これとりくく。脣をひるがへりつゐ久。年の始乃破魔弓よ造つけられ肩と姥乃。離別〳〵るにと。ろりうる姿まそ。おく廣さ道もそぢと。こち乃君よをれりうと。歩みちふ妨もる。臭りの。ゐまろ〳〵ぞ婆こよ。ふそよ退くくりく行と。いふそ入ど。腰を打て目と文う吾妻が額と打まりり。さくくもそくしよまそりてろうくき姿の君ゑ。卒尓ふるこゑゐれど。もゐがいまこえ願ふそこゑりて。汚穢我男をろうこど。此曲中よまぎ〳〵来つる其いると。一通はてえこふくた。花車の女ゐかわゐ〳〵扨ゐ君さうよ近寄て。母の伯母のこゑりをよ物狂ひさゐく〳〵袖先乃

ろうんくく去ぞやと。声高よ呼てつきのるを。吾妻ゐ制〳〵く老女うむひつゐゐ足うけぬお年寄妻よ對〳〵て願とある其ほけぺろるゆとうぎまて。傍辺の編笠茶屋の床机よ尻ふけてやをこひれた老女いく。其ほけこそ別のこゐもいふと。此婆ヒガ月ともおりゐまろる児子一人いが。山崎の油賣そ。挑賣〳〵く貧き暮とつさを者。日来実体うそうくうせだ。女ふじふ心そうを者うゐ称ど。此曲中へ商よまもろ〳〵つぐる。おん男の揚屋入ゐゐよをりく心迷ひ親の口うまろ〳〵ゐくさ〳〵れど。ゑ病みりぐらゐやぐぶおりひまもりひゆる愚る奴しさまぐくよひをそ。いうる宿世の因果ゑ。おりひきろ〳〵そうんく。氣つひをふ情を商ふ君ゑれだ。ろんやこぐをまく死ぬ。安解ゑ聞ゆ〳〵たまふまじ。吾妻さねよ此ほり仏告ろうえ。歎さまろ〳〵ゐせろ〳〵、盃をうと翼うと。

おりふきゝてやるべしとのみ慰ものくどゝ。やうやく病もおこたりぬる名乃
油をうるせつ。此処まで伴まるりしもの。猶ゝくハ一目わすれて。詞をうけく
さまるゝれとゝのゝく彼方をさし招き。児子こゝ人ゝとゝひ名れた。出口乃
杉の木陰ゟ。油擔を挑りて。油をうる古布子。うるもゝびきし
姿するが。擔をおろして毋乃背後よつゐ居て。ゝぐゝりぢさゝゟそ
謂り。毋ハ児子をゟりそ。そゟぐ切ゟ
まうせとゝいゟまゝゝやゝゝ顔をあげ。貧きまゝもうこゝ僕が執着
心語もいとゝんげゝれど。是一朝一夕の支ゟゞ。去年の春ふと
おん身をみそめてゟり。片時もこれをゝ志ゞゝ。人間の一生ハ秋の草ゟ
異ゟゝび。ゟ個の美人を得て。ぜひて一夜をゟゝば。死もとも
恨ゟるべしと。おゝび名ゝ意の海深きゟのゟ堪ゝて。いゝゞゟ乃金

おて一夜をゟむべきと人ゟつゝてはつるゟ一夜の揚代銀百目ゟれど酒食
の價おゝくれの費ゟゝ。小判五両ゞゟりの金ゟてゐてもゟゝゞし
ゝいゝしゟ名唯ゟゝれゝくゝそゟゟゟゟ。拙き我身を
恨て。ゟりふゝできゞゞくゟひゝゟゞ煩悩の大打ゞゞ去ゞ。意慕の絆
きれゞゞゝれゞ。我身と焦を油の地獄おのれと責るのゟゝれた。まゝと
ゟゟ名ゟ古ゟり志ゟる者ハ事竟よ成しゟ詞ゟゟれた。望を遂
まゞゝゝふもゟゝゞとゟりふつき。出口の柳の糸ゟり細ゝゞ垣乃
家ゟりゟき利分のゝゟゟ。一日よ三分五分の銀子をのけゝ
積貯今そゞゝ五両の金ゝゝのゝつゝゝ。岩よ花咲ゝゟゟれど
又人の語るを聞在。吾妻ゞのハ引手ゟゝゝの名妓ゟれた富貴乃
人ゟゝ一応や二応でハ靡ゟふことゟゝゝゆゑ況まゞゝさ

我為なれば。さしも揚代そのほか病の種とかり人もなき我家の閑りに宵〳〵毎よ痩やせり〳〵かゝる命も危うし〳〵爪の情の詞そやう〳〵おこう。今日此辺までいまうで来つ。玆の菜種の為の油もて本うけまかり糟是もてまゐりたまへとのゝしり油搾の裏うを五両の金をいだして吾妻さへ見せさとの親く為を沽もふてこそせうて一盃乃酒うと酌うしく我此痴想とそこ〳〵まろれうと。耻とものぞ語りるが金とてみる紙よ物うさるとなれを。

山崎やをぐりろやく油賣打こびとまで泣涙ふ

とう歌とうきつけうの吾妻いろれとなくいとゞ哀うおりの目よ涙とこ〳〵ぐ〳〵うりや妾ゆ名れさぐり辛苦といろぞ病う卧

こまかまでふ深くおがこまうるこのうりさよ原妾が心貪福貴賤うかりうるど只趣を慕ふれをいそうおんなの貪きをこうんやう物語とれとおうれど此辺い街上のそうちう。妾う坐敷へおをうこのを。傍辺よりる花車の女これを聞くまのびわんど。袖乞めうそうれ此婆々や油賣のまゞしき男とつまゆれまうよい他のまえをおうんでとのくそでもまごも吾妻い耳ふも閉入をいざまんとものく袿つがまる裙さでれ二人女童を服立よ。三弦仏の法来迎王の笄ゆうと。ゆうぐ光明勤下弘の蓮歩とうをを八文字親子二人ハ極楽よそくひとうそ。後よつきそれ歩み去ぬ〇ゆうて油賣親子乃者い富士屋がうふ去。青貝の坐敷と称ぞる一間よいうりて見るふ風流清雅よ〳〵旦美麗う。唯光耀くる月もまたゆく。

都五条坂の遊君冨士屋の吾妻

洛外山崎の油賣餘五郎

餘五郎母

焼の薫室中にうらく〳〵ひてさ〳〵鼻を襲ふ。床柱。床縁。違棚の下の袋棚の戸のさゞひいさ〳〵ありて。天井。欄間の板。明障子の腰板。屏風。歩障の縁衣折。簞笥のさゞひ。都て青貝を鏤とう。二階の厨子文案。文車。文箱のさゞひ。料紙硯。硯匣。香道具。其碁将棊双六の盤。厳器。鏡。筆枕のさゞひ皆青貝をちりばとうしたるもの。酒飯の器とうるも是等の雛妓女童等が持運遊ぶ如く張文成が筆をつゞく青貝を鏤とう。誠是仙窟よりして繪障子とさうしの表紙。衣のおとうとうくとして。吾妻が衣服とうるゝ袿も帯も青貝織とうの織物よりくやあやとの手をとりてさ〳〵西湖の十景とうやうの織せとう。さて油賣の男のそゞと近く寄りく笑と帯一郎の計とそゝ成る上い。

りくやあん名とありしものとうるも油賣にいまざりくもせざりくるゝ。明障子とうるゝ人ありて。うやゝ打笑さとぶふ。こゝろ君とう。こやくも暁のうすゝ正体とあらくゝくゞせやうん。とのみでありる。さく蛾右衛門くさみむひうのくましつけりさる用意の品とうるゝ携へ出よとうぐ〳〵れ。うとうりしてくく。許多の歌妓幇間等廣蓋のうへ黒羽二重の鹿子紋つけくく白ゞ〳〵の袖べうとうる羽織小袖茶の下着箔の帯磨打る切箔の畳紙平塵地の一ツ印篭阿保秋山が川原軍のさるうさる扇紫のおき頭巾書院銀子さゝそゝくいとう大尽乃身上の具とのとうく載てさげ出。大勢立りてさく油賣の男のむさげる

布子をぬぎ。かの美醜の衣服を著そへ。忽ち大尽の姿となり。上座みなりて服息よ。其そこそれ。らの老女いろろ下坐み居ろりぬ。吾妻へみあわ打笑ひ。郎い実の油賣みいあるまで と推量せしに。呆しくさぐ。なとそのろ戯をもてまへをろくべ。蛭右衛門をみ出是全戯よめろそ。其いろれいおのを語て聞をべし。此人い我もそこれ友そ。山咲餘吾郎とふ人るが此ね所用きて上京し。おのを前の日とそのひて此曲中を見物よ来を」お。此主もん身をと見そめて。頻よまろろ支を望しくとそ。おのれいろる富翁嘉客みも。用意みいまろえよまろぞ。もぞ〻頃日新尾賀堂左衛門とふ金持の武士の浪人もん身と深くいろれ。其ろろく。許多の黄金を費せどそ。一夜の枕もゆ。

しそそも尋常みてくまろえろふしおりのおのを媒の意みく。餘吾郎ぬーの誠心を見をべき此計をおりひつきね。唯うをそ乃戯ふおりひあひそとろくな。餘吾郎も其詞の尾よつきく。今蟻右衛門ねーのいまー所のごく。少ーし山崎よとろるて。おりひつきろる油賣みくまで慕誠心を。ふぐろも受おろまひ。いやーろ妾ふ為とさぐりおがーありろと。何とりそろれお報をべき。妾これまで許多の客を接べをど。或い酒を貪るあり。或色よ耽るあり。唯笑を買歡を求る支のふ私知く。香と憐玉をいく惜の真ある人みあるぞ。彼を見これを見るみつけても。郎が如き志誠の人へ又得ぐそ。いそろ等閑みおりひをべるべき。さるゆそも彼老女い

何人ぞとこゝろまどふ。餘五郎いふく。これも蛾右源門ぬしのそゝろあそび。諸國の霊場を拜みめぐるまゝの旅の老女と。ふた一日雇ひくきつるなりといひさして老女みむかひ。汝を労して我望をとげしれば。骨折代のことを与るなりとの仰。彼五両の金を与へ給ふた。老女い金をうけおさめてこゝろこびやゝそ別をつげさまぐくの藝を尽しくく酒をそゝめ。餘吾郎ハ遊仙の夢をむさぼり。吾妻もくづ〳〵琴をうき彈ずるこゑ。魂九天の上昇空。手の舞足の踏どころをしらず。酒酣なるころ吾妻餘五郎が手を携へ閨房ふしまの方て。やゝく時うつりて夜ふけゆく。水もりさゝやくこゑぢやうの月も此日を始として。此一條の春路。守役の十字兵湯ハ。神社仏閣を詣名所旧跡を遊覧するところ〳〵にて。日毎に此曲中ハ来て。

吾妻にまつはりつゝ。吾妻も餘吾郎が美男なると。趣ある心をうつとふけゆく。水もりさゝやくこゑぢやうの月も。名ゐれども吾妻い餘吾郎を養父のめ〳〵如さんし同家中の士なるこゝろ。吾妻が素姓をもしれるなり。去程ニ餘吾郎ハ。吾妻み深くもてなしむようきそ。ものがたる十字兵湯がまゝ人をたのみ。一計をめぐらす。十字兵湯いふく。我石工ゲいふ事聞れ。石塔ハ用べきまゝ石當地にあり。合さするゆゑ。他國へいひつくろひそゝき石をとりよせするとるれば今ハ急ぐくいとまこひ。汝ハ旦前ニ紀の國ふ赴き。高野山ふ登て。まろぐべき墓地をとりそめ。宿坊ふ逗留しく我到るを待べし。我ハ當地ニ殘り。石塔の成就せん後ニ待ち後ゝゆくべしとのひけれた。十字兵湯ハ老實ある者ゆゑこれを偽り

計ふ。窓をうつ。ものうきたび枕。ものうきたび仕るべし。隨分石工といそしめよ。一日もはやく彼処へゆき越るべしとて旅装束をととのへ。紀の路をさして出去ぬ。かくてその後い餘吾郎ゝれをかるものもなく。吾妻が許よ連留して旅宿よある日い稀なり。爰ゟ又數扉賀堂左湧門といふ武士の浪人此年の春より吾妻を深く慕て許多の黄金と贄とをもたらし。吾妻い殊よ彼をきらへさまざまに乃ち胸をこがし。手段尽して品をとりて相ふんをもとむるとも。一夜のそへ即い更ざる。ものうきものゝ深くうらみ恨る。抑餘吾郎よ此程をそしりく吾妻が許よ来らざれた。吾妻いこれを愁へ。若心変やなどおもひ届し。嬶々をてまつるとも。病ふ托して打籠居るふ。

一夜卅ぶりの乞食とおぼしきもの。古菅籠を背おひ。富士額乃奥庭より吾妻が閨よおのび入。独臥居る吾妻を捕へく。手拭を口よくませ。菅籠の裏よおし入てこれをもち。旧のしろより逃出ぬ。ぶが。ぶ。ふそ里去大きな川のかたよ一艘の船を繋く待人あり。彼卅ぶりい此よ菅籠をおろしく。裏よ里吾妻を出し。口よくませ手拭をとり捨て。吾妻を船中よ投入より。吾妻をきえ〳〵となりて人ごゝちもなかりけるが。やありて周をひらきみつきく四辺をみるに。此川い淀々として宇治川ともおぼえず。大河あり。山松よある人い月是堂先湧門なれた。吾妻を唯の紀生なるばかりあり。さるにても堂先湧門を殺よ来ぬるそ。旦窺養の金をもて人船を遠よ漕いださしむ。吾妻を船中よ打伏て泣居さふ。

夕立の雨と蓮の花をそこなひ。木枯の風と玉の枝を折るにたとさがる。堂左満門いかり怒る面色そ私中よ座ー。吾妻を罵ていはく。汝ぢ輩よめくばる。我ぢよりとよくとも我を癪人のごとのみきしひてあざむくもいかり理そ金だくもらるれど何者にもの足ぱ阿曽比のあしひなしびや我汝ぢよりき目を見せく。十が一つ憤をそそぐあとおもひて。ぴく奪ひとりくだ。野ぶせりも罵くくちをとぢぞさて此舩を遥なりの芦深きそろよ槽入く。堂左満門い堤の上よりぱー。はり手もく舩中を見おろー。甚女を此よ引あげく我酒乃伽させよとのつて。畔ぎりいちろえいしのひ満。吾妻を引立て堤よのびんとまるよ。吾妻い私深よ去を抱つきくめて身をそぐさば。

堂左満門いこれを見く。ちよとうなとひ満。手酌よ数盃をふけて又舩中よりはり来つ。ごづう吾妻が手をとりてひようそんともるお吾妻いとて声をうだつて泣さりぐな。堂左満門いまいく怒ー。やこれ汝我よ打ちんもまもりのひて。深首をうくて引倒ーこれを擲楠枝そぢくくと落。髻きれく翠の黒髪そだるが。堂左満門拳をあげりて打んとそるが吾妻ありくるらく桃よ立上ー。いとまいくとぬぐく張ー。おるる水中よ私いくんとそーれ。堂左満門い盧胡。汝身を投乱気食のりそあまりて抱きそぬ。堂左満門い盧胡。汝身を投乱体を添て我を赫ちんとそやー。そくく汝死ーとうとも我汝をくもれぞ奪ひとをなまば。我よ於く何の難義うのーん。うあぐ金欲先にも命欲後にもやくあきまりー。汝死ーとうとも我汝をくもれぞ奪ひとをなまば。我よ於く何の難義うのーん。うあぐ金欲先にも命欲後にもやくあきまりー。汝やまばそろ近も

飯をまづとらせぬ。吾妻いやうく泣やうれ。堂左湊門を野ぶせりよ
船を漕しやく。旧の処より飯望。吾妻を岸の上より投上く。船をいだ
とりあへく漕去ぬ。吾妻も毒蛇の口をまぬかれとうくと此ところも
もだて草茫々と生ちげり。毒濃ある野原まで方角ぞふもれど殊更
夜中なれどいづくと心あてよ走るべうもやうびぬ。恰足ある化蟹のごとうれる。
もだきやうなく。只声をそろへて泣るゝ。側づへの女童ゞ声して。
こゝの君何ふうもそれを目を醒しやと。よもや心つきく睡を醒
せだ。これ南柯の夢うゝ。吾妻もいとゞゆげ息とつゝ
夢とうしやよとうのく。身上の汗をぬぐひ居る杓しを。花車乃女
来てく吾妻よむれ。堂左湊門ぬしやと賺ぐやんと議し
こゝろの。此庭の冬牡丹の花の散比丸九日を

期よ金を渡して。曲中を出やんと約したまふ。かん男い彼主を
きこゝみよし。そんなり心ぞかし。彼主のごとを金多く持る人よ
おりれみよ。もん男のごと幸ならびやう。男受のみもろびくちひ
まえ。とのくそゞろ笑を。吾妻をれを胸つとめさ
がりてちぐしつゝ。
〇遠ちおりんとうあれ時い近き秋ひ
みやと月。今餘吾郎がみの上あり。餘吾郎そうぬのかど。路用の金の
うちを遊興よつくるが。後よ吾妻と揚でみしてを奢をきうめ
るゆえ。純の間よ彼常住金の二百両石塔料の百両まぞ残らん
つゝ尽しけるぞ。いふをびきとゝ更よ術計とみれを此かど
吾妻が許よもゆびん旅宿よ籠居くひとうと心をとうとう。吾妻
方よりを日毎よ文とおくるが。一日の文よ堂左湊門妾と賺さんと

いふ〳〵つきて。急ぎまいらんよし越乞ひ。餘吾郎へまんく心を
くるゝ。其夜かしこゆたく吾妻へまいるとて。引受乃
ものと歎き。よき思案〳〵くめぐらし。注のごとく。餘吾郎今更
常住金石塔料のなくてうかゞふ金とりかゝり尽せ〳〵ねどふいん
がるに。先當座の心をなぐさめて。後よ良計をかんがへんと。
まづは我急よ本國へかへりて金をとりよ。吾堂た湯門より前よ贖
いてとゞべ〳〵との日吾妻をこれをはてもとく心祝安んじ。酒酌
ちく鬱結をなぐさむるが。餘吾郎へ元来酒量あされども。まだ〳〵も
愁ど忘よとんとふ酒と飲ましめて。此夜も爰よ宿〳〵翌日も飯らん。
又三四日連留〳〵四日めの日彼吉見の坐敷のそこらく咲く庭の木
草をあらて。二人まるやふ酒を酌えへ〳〵るが。吾妻手匣をさぐりて錦乃

手帀よりてみる横笛を取出し。これ妾が父の秘蔵せし漂髪と
ほこん笛なり。もん身も亡る夜の物語よ笛と好なへ〳〵のまんし
さゞめて堪能よおわしたるよ。妾も汗端をまねびぬるとど。憂節滋身み
ぐまば静心あくまでおきね。孫ぐくをへまんれとふ餘吾郎いへく。
おのれとても拙れど。所望とあれを默止ざ〳〵と。并笛とりそ
一つの笛を二人あらび居く其手をを人餘吾郎指を擬た吾妻こんと
吹出しこれを是冬乃始小春よ時節よ。殊よ暖氣ありしが。此
庭の花壇よ植よる冬牡丹の花霜雪の欺をおそれび咲ぞれて。
園色天香春の花よまもるくおとらび造化の不思議をおもへり。殊
よ奇きを一つの朶よ二輪の花並咲く一輪ハ赤く一輪を白し。これ
いとゆる雙頭の牡丹乃。時よ二の殘蝶花香とをそひ翩々とし

よろこれぬ。此二つの蝶一つの白一つを薄縹の色なり。是もまさき奇なりとよべし。ちるに吾妻が手飼の猫花の下より睡居るが忽眼と醒して二つの蝶を目がけ。縦よつける鈴を転〳〵と鳴して起上り駈やぐそ。餘念もみじよ狂ひなり。折しも庭さきの柴折戸の外面より白水の手束弓よ短冊をもまよつけて持る歌占の女趨趄耳をうごかせて笛の音色よきとれる体なり。こるさの二人をよく笛を吹をは」其声咽々悠々として人とをして腸を断しむ。猫そまぎれく蝶よ狂ひつゝ薄縹の蝶をとりて喰殺しぬ時よ北風えびーを吹て牡丹を揺動かしけるが。忽赤き赤の花をとりくと散て白き方へ落う。餘吾郎これと見て笛の手をとゞめていとくと。あゝ不思議や牡丹花下の朧猫よ其心蝶よあり。我よ心牡丹よあり。一枝よ二輪の花咲く。

赤白二色よりなる。豈天工の私ならんや。昔唐の玄宗皇帝。沈香亭前よ牡丹を植て。楊貴妃と共よ愛しめよ。是よるより双頭の牡丹なり。帝これを見そめいとくく花木の妖ありと賞じ給ふ。楊國忠よとまふしよ牡丹の花の王よ一枝よ両花の王なり。今ちぐよ南朝北朝とうれしの。一天下よ二人の王のおりしまして異なれば。然よ南方の火よ属を紅牡丹水よ属よ北風のちる散失しぬ。北朝の聖運強くゆしく。足利殿の徳風草木をなびくしく。南朝味方のこりくの衰花よ散しぬよ前表なりん。前の年信州笛形の城よ亡びぬれ。相摸次郎時行并よ其舘打死しける。大仏九郎貞直ならび義黨餘類南朝の天威を假て。足利殿を亡んとなるよ。緋威の鎧草よ刀をとりくる冬牡丹霜の剣いまのぐくも。北朝の烈風

防カあらん。今凡そ紅牡丹の散る平家ニ属し。時行が残黨滅亡ろ疑ひ。まゐくまゐ足利方にくそへ吉祥よろこばしげいふるが。吾妻ニ淫ひ。二ツの蝶も夫婦も同然。郎と並て百歳を花ニ宿てこそあらし。心の頼ニ遂らるゝだ。女蝶の方ニ飼猫ニ命ニ取ら我ガのこゝの不祥ニこそ。昨夜ニも増ま限て根引ぜんとこゝよりこゝ。妾ハ湯門北日を。そこんを愁るなと。いく彼が方へ根引の相談ニ此牡丹の花の散時節ハ。活存れ心よりこゝだが。程て奎牛織女の絶ぬ契を羨て比翼連理と祈言ひしも。其時ハ胡蝶の夢とおぼしめせと。餘吾郎が膝ニ顔ニ。おゝあて。声をゝ泣ゐた。餘吾郎ハ背ニ極採てそりゐぬ。

扨前程より外の方ニ立ル歌占の女ニ。花壇の方ニ入目も申で。頭ニ。こふけ。今宵ハ笛の音を尋常ニ。女のくける足駄ニそはくまる笛ニ。秋の鹿ニ。こゝよりこゝ夫ニ鹿笛ニ。美人の吹ニさむ笛ハ音いろのいゝーさよ。とちひとりごちてそ居ゐる。かく歌ゐりしも餘吾郎が奴僕汗もおゐてよ息もつぎあへだ。庭でよいそぐく茅ゐゐた。歌占ハ女ニ庭木のおゐゐる裏ニゐ入ぬ。かの僕ハ座上ニ跪き。餘吾郎ニむひていふく。ハん迚ニまゐりゐ。ゐゐくハん飯ニハ。そいふ命ニ変ずそこゞぬまバ。僕いそぐく。いざゐゐくと急がしやそ。餘吾郎いそぐく身支度して僕と共ニ飯ゐ。あとニ吾妻が何ニやと。胸をいさむ歌

物案じ。吐息して居るうち。彼歌占の女ハ木蔭を出て又柴折戸乃
りそと立寄声をやるよいひ名。夫歌ハ天地ひらけ始より。陰陽乃
二神天のちまたよりあひの。小夜の手枕むすびさだめ。世をまもりて。
今よりそぞろ妙道なり。夫婦の相生縁むすび。待人の来る来ざる伊勢
の濱荻名をうそ。浪花のよーわもへーく判じてまわるべ。
占うそあや。歌占とうそあやとの名乙なり。吾妻ハてれ折よ
歌占。爰よ俄入をあべーと。掌を打つーて女童をまび。うく〳〵せよとのひ
つくれば。いくへの声も長露地の飛石でひよ彼方よあれ。かの女をとうそれ。
吾妻いそ向合歌占とひうそまうそれ。安き事心得たり。一番ず
手をなうそうそん短冊の歌を讀りく。へーく考てまわるべーと。
いへにく引をさーいざそは。吾妻を心よ神を念じ。をーくのおとく

短冊をとりあげこれで
学びかひこのうちの時鳥ちやが父よ似てちやが父よ似
とよ歌なり。女志でうそを教ていくく。ん有を幼くて実の父とうそ。
養父よ敵らをあべーなりにやとくば。吾妻いくく。識よくあの。猶
うーを判じそこひよとよ女ひいくく。鶯の子ハ子なうう時鳥の鳴
音かれうそ宿政うそ。度く難義ハなるべれど学ぶあうとよ
字音あり。あうそ逢の訓よ近く。又来る春の幸よ逢とよ占う。
あもしもおぞーいへーうよおぞ。吾妻をふー愁とうぶき。ある
うをーや苦ーうふぐくいうとひて。彼女吾妻うかさ
うよおきうる笛と見ふく目をうるぞ。卒尓ぶーうのひてくうを
とりてうちなるこれを濡髪とよ笛よなうをやとうくた。吾妻を

ぶかりいふーてこれを見ありみやとさぐるふ女ぞくく我いとぞ
是と見たらばきん身を伊勢の國の樂人二見太夫是次とう人」
この娘なるべー。かくて我へおん身の姉なるべく其證を見らぐーとぞ懷
より笛の筥を取いでーて見をくるふ濡髮とのふ金字ありてさて乃
笛ぞとさる見るふ間よ發を不容。符を合せてるごとく箱うれべ吾妻そ
且おどろき且よろこびてそへ姉うくまうくまふ。姉うくありとへーど。却
うくまふ。姉うくありとへーど。却く身と妾とうぐふ年三つちがひー
兄弟まそ幼よりうれしくよりうれだ。少しもおん顏をおぼえ給ふ
今日たらばも此笛が證とありてめぐり逢ーへ父うくのまみふり
そぐびなー。さりぐーと愧き此姿と泣くくば。姉う涙とおーかくし
いかく少も恥べきうくあらぐ。養父の急難をそよよふ身と賣しと

いふよへ。風のたよりに聞ーうどいづくと呼もさぐろあう秘ぐ。なろうくく
おりひなぐ。琴ぬべき便もなうつ。まぐうくぐさうへの母人乃おんこと。
恙なくありとそ否とうてぐ。養父も母儀もおりひかけるく今へ俗
出世あそだーぬ。夫よつきてへ物語るべきうさぬぐあり。笑へ人目も
端近うれだ。まぐこうえーうぐうひて。奥の一間よ入よろ。時よ箕踞
蛙右衛門沙土七とへの僕をつれて樓上をそぐり。此所よ出来て
四辺と見まはー。声をひそめていふるへ。此も端近うれどもあうよ
人うたこそ幸うれ。我汝が心底とうけーゆゑ。密々と語くまれ
そう。我乃ぼて隱謀あれより。執權職山咲庄司よ何ふ罪とおせて
うしうんとうよ折節餘吾郎が上京と幸ひ彼とそそのうーそ
此曲中よ誘放埒者よせやと計ーが。彼へ原聰明て思慮乃

青貝ノ一枚式ノ上ニ坐敷

都五条坂冨士屋の庭乃名ある冬牡丹

一枝ニ紅白二輪の花咲是いとゆゝ双頭の牡丹

浅ましき者哉と計もひなりしとそ。父の外吾妻が艶色を染て心を乱し。許多の黄金を費し。父の代参して高野山へ納むる金までも残らず使ひ尽せし報ひ子孫に當命猶舎を帰すを能べくもあらねば。我且彼が在京の中の放埒をくしく主君へきこえあげて譴責言とりもなをさず切腹かくてあらん払ひ必定ぞ。おもふとそれ其罪を父庄司よりおよがさんそ。親子とゝもよりしものなり。我宿望をとげなば汝も禄あるよ。とて。武士よ取立得さすべし。森ばーのうぢやも主用も已よそのの。今夜が曲中の餘波なれど。阿曽比よりと呼来ませ。汝もとゝみ一盃をとりの前祝せよとひくれだ。沙土七八小踊してよろこび。勝手の方へ走り去ぬ。蟻右衛門はさのしばし臂枕して寐をり。膝の頭を打て拍子をとる。月おかつらき小倉山其名いかくもぢりくりと。曲舞くの音頭を調ひ。寛々として居られ折しも。旅装束もそる武士庭でうめき来るをれを是乃梅谷郡領の家臣袴田紺九郎ぞ。蟻右衛門はかくとそれを見るよりいそぐしを月と起して立向ひ。氣づかや紺九郎主。何等のゆありて上京せらるゝぞと。紺九郎ハ息もつぎあへず。火急のゆを告んとす。夜を日についで上京し。和主の旅宿とうぶ探つるに。此所よおられとゝまで来りぬ。爰ハ端近そ密事を語ふべし。案内しまくくといそぐをれを。蟻右衛門ハ盃氣づかひ。ゆる小坐敷よ連去てくやく様子を聞しまくとい。紺九郎声をひそめていふく。和主と我とは心を合せ蛇ケ谷の老女乃

味方みつき。且月影个谷〳〵梅个谷の両家を亡し。其勢ひ熏じて
塾懐の旗を飄〳〵。南朝の天威を假奉て北朝をうけ。平家
再興の時を得て。我輩も一國の主とう。歡楽をきりむべ〳〵と
企さる隠謀の密書を山咲庄司よ奪とれて隠謀あらん庄司
君令とうけ。上京〳〵て和主を捕へ鎌舎よりくとて。旅の用意を
するとはこいつふもとぎきと驚く間もあらず。我宿所よ捕人をむけらるゝ
我宿所よ捕人をむけらるゝ〳〵ゆゑ。危き所と斬抜辛うして逃
のびぬ。和主もとく〳〵辻支度〳〵。蛭右衛門も忽面色
青草の色よ変じ。心あわてうのぶるいしがちばし〳〵ありていふやう。
隠謀露顕のくい片時も當地よ足とゞめ難し。一旦両人とりくる
身を隠て時節をうかがふにしかず。再會の所いそ〳〵と耳よつけて

そゝけまて。紺九郎八打點頭て出去ぬ蛭右衛門い沙土七を握
有増を語聞せ汝もそく身を
路用よ与へ主従とれてもの〳〵
うりて此日も已よ暮けるが烟花のうへ
まく。二階坐敷奥坐敷間毎〳〵よ酒宴と設或い弾或い謳笑
れを耳語あり。おのがさゝめく奥ドろるが唯青貝の坐敷のこへ人けも
く。灯火もそざりけり。かくて初夜
ものび入る白髪の老女椽よ上り
絲の眼とこする廣坐敷の違棚よ
あつりて彼笛と奪取懐よ押入て
こそ〳〵手燭とり。姉と尋て此と

あやしの手燭の光ほの顔とりそへて。ヤ。そのさいつぞや餘吾郎君を雇いまして来る婆々ぢゃ。ようこそ老女いでませたまえ。いとど去んとする衣。歌占の。女弓とりて押戻せば。老女をそれをやり払ひて。又踏ませんを歌占ひ弓と絃を取りて。やにこそゆる即坐の扭ぢづく。時を怪哉老女が懐よりしる笛おのづく音を発ーそれ。吾妻を驚き。さくこそ曲者其懐こそあやーそれ。といひて手燭をとりつれを。老女を手をやく打落と二人い探る。暗まぎれどもよ。行方もそれどもうに

是乃鎌倉蛇ケ谷の老女ぞ。味方を招き軍用金を集る。諸國の霊場をめぐる旅の女よ身を物ー。ぢづく當地よ足をとどめーが。此夜笛を奪ひとりて又他國よ赴きける記念の竹刀

扨も其時餘吾郎い僕のむえ心をつざれをと急ぎて旅宿よ皈りてげるふ一昨日紀の國より皈足南方十宝云濱腹十文字よ掻切て朱よ染りて伏居り。餘吾郎いそれとありそはどよりこいそもいふとありそはどよりこいそもいふとありそはどよりこいそもいふ

浅石塔成就の日を待て後より奉べしと命じおき是迄
留主のうち旅宿のつまらぬ偶五条坂の遊君よもやと
勿躰なくも浄先祖浄追善の為と浄摧あそばされ僕よ
預かれる常住金を捨今より至てつゝましく先非を悔自殺
仕りやうく残金百五十両浄在り此金子を石塔料よろしく
乍憚浄父君へよろしきやうあげさせられ僕が死骸浄と付
たゝれで生と世と雖も後と存ぜず恐惶頓首

永和元年十月 某日　南方十字兵衛

餘吾郎君

とかきそう餘吾郎これを讀終て頻よ涙を落し扨も我放埒よ
金子を残らず捨るを知り我罪をおのれが身よおもひく

切腹し。のちくまでも馬鹿者不忠者とのゝしられて死しる忠志。と云べきものぞなし。戦場の打死も後代よ養名を残さんと云こそ命もそこまざれ汚名といふべき忠死せし者へ古今よ稀多。不忠者とのゝしられた。こゝちをもり。今景ひあたれる心底をもりやは。腸もちぎる不祥多。歌占の歌よ

北を黄よ南へ青く東白西くれなゐ

とひて南方へ青きれくさる。此とりて考まそだ。浅黄色の蝶猫くれまれくる。此南方十字兵衛が非命よ死るべき前表まそありしのゝ。唯冬の蝶のめづらしとのみこゝろへしは凡慮の拙き所為。彼と云是をおりよ。我傾國の色よ迷ひ祖父追福の金と失ふのみならべ。

忠臣と殺せーよ。不孝といひ不仁といひ。我が罪の重きあたうを知へうもあらず。今後悔もそれどと更よえうとにはむせう。生るくよりの如く。嗚呼面目散々取つて。悲歎の涙よ十字兵湯。おろざーんこ分れど。汝ら放埒もーてくれよ。我が罪ともいへ。いそぢ人居らざる我よ今自殺して汝が死路をそそく。主従とふ死出三途又の世へ汝が臣と生まれく。此恩を報べーとよて。書置よそそる百五十両の金をとるあげ。さるそも此金いふーてそ石塔料よ残ーよくまるやと此不審それを。なく四辺とかりるみ。十字兵湯が常よ方をそるのでる刀よ。乍憚此刀へ餘吾郎君へ記念よ差上奉るいとかきる紙札をつけぬ。餘吾郎これをそく。誠よ是へ前年相模次郎時行信州笘形そ亡びる刻を此十字兵湯日月のお旗を奪て我君判官よ差上る扶群の功によりて。我君より賜る朝烏と名剣よて。陪臣の方よ稀な誉ーそ。當時義者おかりしと云。我へ其時幼年よそへば夢の一昔幸哉我今此刀よて切腹せべ。主君のお手打よ多同然よそ。聊罪を贖よべーと心を決ー。両肌を抽ー脱て。彼刀を投放ーるふ。これ真の刀よあらず。竹よて造りる刀よて十字兵湯が自筆の文字あり。これを讀よ。

拙者此度の切腹ふ彼よお咬学板
防經気満腹拵れてよト

とう死つけう。扨ハ此刀の方と責て百五十両の金そそのくれるよ疑ひ。此竹刀のう死つけーとへひくまそ深く我方のよをろのくまそけれ

心底の五分さよりのひて又死骸よとりつき泣るがいふ甲斐なくてもの活てハ居られぬとひとりごち。再我差料の刀を抜てかとく腹よつき立んとする折しもやれまちあれかしと声をかけて次の間より走り出る。庄司が僕路平といふもの此体を窺ひ餘吾郎が手よ取つきてとゞめ。汝ハ何用ぞ上京せよと云る。路平い手をつき頭をさげ恭しく松者ハ昨日京表仕ひより帰りまいらせ候。ちかき頃ハ若君連夜もん蔵見おきやれ名よ君のお旅中よ殊の外気づかひ遊ばされ候。松者よ余ぜん渉安否をとひ参らせよとの事よて参りまいらせ候。君只今渉自殺なされそへ。十字兵湯いふ大死よ有りや彼渉短氣よて大死よ及ぶまじ。其方ハ上京せよと。其竹刀よ書残せし一人此あまよりくだ。彼が忠死とおもひ嘆

紀の國へ去べーとある命よもそうぞいまゞ若年のもん方と手放ーて。遊所おりゐ都の地よ長く逗留させまうせーハ我一生の誤り。今悔ゞともせんもなくよー。我已よる野山よ逗留ーて相待ゐれーとゝゞも。陸登山おゐれ。こゝいうる女房よ遅滞と気づゐくろひ急飯て一昨日京へー。若黨奴僕等よはなし。五条坂よ連留ーおんてあん飯まうたよう。そゐくとゝゞ常住金石塔料ともよ殘らず。おんつゐ捨の掛まうれ。こゝいうぶるう。我おん側よつゐそん居ーばいまうふも諫言をもしあげそさあるよ不行跡いさせまうしたよ。そいうふをゞさとおりの煩ゐゞ。そゐくろう殘念とおのどそゝゞ。昨日石工来ーおん石塔殘らず成就せーゆゑ。代金をまうし受そのゝ償べき手段もなく。情なや

おん國元そゝ少ーもおーたおんよ心と乱ーあひてのまうう。尋常の諫めて思案をきうゐれ。我一命をさーあけをりておん諫まうしたう。又朝烏の刀ハ刃ゐもうそゞゞ物うれゞゞ時の用よ是非なれ。これを賣代ーて金子百五十両そのゝおもこれと百両石塔の價よつゐれ殘る金ゝそ石塔と高野山へのゞさあひまうて父君の後願望乃ゐばを遂らま。一日もたやく鎌倉よおん飯ありて。我書置をゐておん身の墓を晴され。必ゝ我切腹をおん悔ゐるたやうにまうし上べー。父君のおん目よそゝ餘吾郎君の守まふつさそ来る我れたへづまうしたゞ切腹なれまうし分さうぐー。おゞ死るとうばおん身にゐり

其罪を引うけて死ぬべーと。已よ覚悟をさうらう。是ぢん父君をあざむき奉れば。其罪ハ冥途よりもんぐ俺をまうにくさうらう此度の放侠無態をば後悔あそばされ此後ハ阿曽比ぐうんを勿論をべてあーきまん行跡をつくもん慎こあるやうに。我よろこそよろくきこえあげ礼よとこん孤児一。鬼角君のもんもの苦よ仕。囚よ残せ妻子や孫のもみぐさも心よかて。あとくのもみとさざめて氣づくちんりんが夫等のこと一言もいん疎さざる心のうち依推量おそざされそう。さぐうり厚さ十字兵湾ゞ忠心も。今ぢ自殺をべてん水の泡と相成ん此処をくく陸分別おぐさまそぐされーて。うーを物語りて悲歎の涙せたあべ。餘吾郎もれをぼて益歎きふ迫るるが。ちたーありてこうる。十字云湾う

ん残ーる詞ーとん此竹刀の昏置ーとん。死ぬも死ぬる義理うれた。生害へーをまるべーさうもぐ夫みーても。十字兵湾よ常住金をとうれ。石塔むう高野山よ建ようとのひそ。おくく国へを跋ぢ足ぐ処理うれた。我いまぐく身を隠ー。ありて朝烏の刀と買ぶーそ。十字兵湾ゞ家名を立る便とそべーぢん。此昼置を携て漫舎よ飯ぢ。我ん面目うそとそて京都よう直よ行方うれぞうし。父母よ告てれよとんあるあ。さそ十字兵湾ゞ亡骸を病死乃体ーて鳥辺野よ葬ゞの金と用ひて石工よ償ひ石塔よ書簡をそえて高野山よ送をうん。ーこの度召連る若黨奴僕等ん此所より直よ暇をうべー。路平一人を鎗舎よ飯ら也。旅宿をあけ渡ー。十字兵湾ゞ忠義の魂をとうる此竹刀ん我一生の守よ

そぐーと。餘吾郎これを腰よ帯て此処を立退。洛外の菜畠村
といふ処の小家を借昨日よりの浪くの憂身とそ。手ばこ
貧焼の業をすて。そこそこく月日をおくりけり。〇かくて路平ハ漁舎よ
飯屋。主人庄司夫婦の面前よ出て十字兵湯ガ昏置をつぐー。
くと告けるゆ。庄司夫婦ハこれを実。十字兵湯ガ忠死しハ
あれもそて。児子南餘兵湯と共よ且驚且歎けども庄司の怒り
つよくれた少の宥免もなく。其家財を残らず取上妻子を唖方払
よでそくりる。十字去湯ガ妻真弓といふハ夫よ年四ツ五ツまさりて
半白の老女なり。児子南餘兵湯ハ前年妻をしぬ。窓太郎
ハこのそ今年五歳の男子あり。かくて餘兵湯窓太郎を背おひ母乃
手をひいて年ひさしく住馴る鎌倉を立退涙よ袖もかーあんど
さのむ木陰も雨漏そちこそ。立ちぬべき所よふみくれだ。真弓ハなか
ら歎き夫十字去湯どの日来の氣質そいささうと那そる
心を持ぢ行ひの正一ぢ人なる。今更年よも恥ぢ。阿曽比ぐくよ
主人の金をつくひ捨ぬーあ。妻子の前も恥からだやー。本心よ
あるべくだ。物よ狂のやーぬくん。自殺しものハ汚名ハ世上よ隠れ
なく。彼ガ類ハ武士の風上よも置まじき者のかぐく。死後までも辱やく
みの恥よ心つきあらばや。家名を汚しそのまゝだ。子や孫まで不忠者都
の子共笑ると。一生人よ指さされ忌嫌ハれんと不便とハおがさだや。

悌めーの十字名溝ーどの。怪当死夫やと。涙よむせのいろきこどた。主人の罪を免にごきて。忠義のよあふ死せーとな。夢よもまーぬぞ哀まてる。餘兵湯も勸まつ受ぶれーどもたとあべきゆうう移だ毋をつぐさめつてつのふ鎌倉舎を出去ぬ扨僕路の平ハ多い呼存やありん。直よ眼を願て行方ぶれぞうりふり

㊀我雪とおもて厄輕ー。身受の千金

餘は吾郎旅宿よりむん来て飯しーう後は。吾妻ゞ許よ音信をぜざれた。吾妻いいと氣づくーく文き人を雇て旅宿よつりー。音信を聞るん。使飯てそいるへ。餘吾郎めー旅宿を明うーく國ふも飯てあんだ。いづくへ行方ぶれどとやそといふるんだ。吾妻いこれを聞ーく。胸つづまつく表現もなくあをまどろて。

さてハおおく黄金を費ーめめ世ふまうりめのーうやうとそそもうりうと打あーて語うめぬそそ悌ーるれと。或ハ恨或ハ悲りのも咽よーうべ夜も神れぞ。月日をるんべきこそちをるんどいふむもべる姿の命。強面消も失そ焦ま物をよのをう。かくて日をおくるる。勲尾賀堂左湾門冨士屋よ来てそ。吾妻ゞ身の代金ーそのひつれだ。いよく身受のーの方へやけとりふる。吾妻いーくふせだ。只泣てうけゞされだわるゞいとうもう。花車の女よるハ。吾妻身受のまとうけゞぬハ我まてハうう。彼の恋よ背を捨おれてん。外くの阿曽比るよあき癖つきて。我活業の大る妨とるれだ。打呵てうけゞせよーうへば。花車の女ろえいとくいふく吾妻よもひ。或へ理を説きかん。

或強くいひこそせど。餘吾郎ゆゝでハ夫よせまでゝとう称て心よ拵ひそれだ。いうふいひてもうのひらだ。花車の女もりそあはしてやうくとあしよ告るよ。あゝハ大よ怒りいでこゝば辛目見くゝして。吾妻どゝくて上着の衣そ着ぶ。肌着一つふゝして。おぞれ帯そて高手小手よくてまつくく打擲れだ。吾妻ハ声うるまでゐ泣さけぶ。庭よ植てる遥よ隔よれ。假山のかたりの松の木よ繋おそぬ。ゆくりの名妓をかく悩すくあるよもつ利そあよ貪る烟花のむだんる人心うゝ慮し。此夜堂左湧門此の樓上ふ。群妓歌妓そあまさつどへて酒醼し。笑ゝよめゝ席上ゆそりそらて奥ゝじくり。これハ堂左湧門吾妻よ辛き目そりよ迚。此方のよのゝげうゝ紙ゆせそ雛もどき心ゆゝべくれどゝそは趣そゝぐる愚そ。吾妻よ嫌つれども宜ゆり。此時を已よ

これ霜月そ。寒氣昧よ厳く。空のくもきびしう風吹あれて。ちくじう降ぐる雪。紛こ揚こゝて柳絮のおよゝく。鵝毛を散ぐく。ゐるうちふゝく積て。一面よ玉よ敷うゝゝゝぐれ。假山泉水。庭の木草。洲濱形。葦手形。立石。蒔石。滝落し。架垣石灯籠のぐるび。庭上の好景前栽の荘厳。そべてふ白妙よ埋まく。心ゝう遣水もいというむせびて。池の水もえもいはれて。薄綿の肌着一重ゆゝだ。寒氣肌よしみり月上いらだ。手足凍てこゞこゞふ月そりぐゆれた。松のこぞゑの雪さとこぼれうるそ月よ積ぬ。彼方の樓上ふ。舞妓の立舞影明障子よりう。歌妓のゝふ声もはえ

りふゝ越路の人の月あくいづゝの人の花。撥もうよてゐ沙婆世界

おりふてよびね白糸の昔がまーぎやかりくよ。深くもろんくの
糸のかりまの物ゑん
ととふも我身のうとゑほいとで悲く泣よりて。あるくれーやうな
げやおりふ岸ふへそふはますじおりふぬ方よ花咲よ。身のうき草のとけ
ろーぬ情ふ死心ぞうーいふ妾を憎とも。雪責よいわまりぞや。くまで
苦痛をさせんよりへ一ゑひよ殺してよとくどくそそく泣叫ど。彼方の
楼上の騒よまだまて。きこえぐれた。誰ひとり哀よろふ者よふ。
雪はまだ〳〵降まさり。吹雪よ打まく撲地倒まさうれて。起上り。
涙と血と相和して流ーつ。氷の地獄八寒のごとくふ
忽身とこごて。紅連の衆生よ異ならんべ。髪まれく額よこごまと
かるまる黒髪も。雪積て白髪のごく。なまーぐ身も氷をゝゝて

倒ま伏。息もあけよ喚てぞ居ろがて時刻もうろ小夜もやう
やく更まりて。坐敷〳〵の人語もやみ。雪も降やまるふ。庭ぞゑの
竹林さやく〳〵と鳴てつもる雪散乱をまーげる者つとのぞこう。
吾妻八此よんやう〳〵頭をあげ。雪ありよこれをうるよ。覆面頭巾
廣袖の衣服手甲股引まで。雪よまぶる白装束。ものびの者と
見えるが。雪踏分て歩来つ。小脇よ抱る千両箱よ。吾妻身受
金と書る札をつけるを。彼方の坐敷の床の間よをゑおきて。
身と轉ー此方よ歩ゝ来まて。吾妻が背後よ立まうり。氷うれ刀
をそろつと抜放ーくれた。吾妻八驚き括ま〳〵起退るがこく
おりふたかる呵責とうけんよう。死ぬふまりーとろふぞ覚悟をきはめて
身を投つけ。襖さーのべてぞ殺せ〳〵とよ寒よさゑれて曲者八吾妻が

いまの女きり松ひりのを背ゐ乗て。りくの所ろりんぐろぐ。
玉塵を踏ちらし雪烟を蹴立くいげくともなく走去吾妻に夢の
裏之事夢と思ふこそ。此者之負まゐきぬ。ろつふ千お箱と
携てあのび入人と盗て逃去しふ世ろめづらしき盗人ぞり。是うかつに
いとれあるべし

雙蝶記卷之三終